第九巻

まおゆう

Archenemy and Hero 魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」

漫画 石田あきら
原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

Kadokawa Comics A

まおゆう 魔王勇者

まおゆう 魔王勇者
「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」
第九巻

Comic Ishida Akira
Author Touno Mamare

漫画 石田あきら
原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

KCA264-12
角川書店

9784041209387

1920979005808

ISBN978-4-04-120938-7
C0979 ¥580E

定価：本体580円(税別)
発行：株式会社KADOKAWA
KADOKAWA

まおゆう 魔王勇者
「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」
第九巻

まおゆう 魔王勇者

Archenemy and Hero 魔王勇者

——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——

第九巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

Kadokawa Comics A

Kadokawa Comics A

まおゆう 魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」

第九巻

Comic Ishida Akira
Author Touno Mamare
漫画 石田あきら
原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

KCA264-12
角川書店

KADOKAWA

魔王が…
撃たれた…!?

まおゆう
魔王勇者
第二十九話

Archenemy and Hero
29th chapter
第二十九話
蒼魔の刻印王

あおやま
Archenemy and Hero
魔王勇者
——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——
漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

まおゆう
魔王勇者

第九巻

漫画 石田あきら
原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

第二十九話 Archenemy and Hero 29th chapter 001
蒼魔の刻印王
第三十話 Archenemy and Hero 30th chapter 061
魔王が…本当の勇者だよ
第三十一話 Archenemy and Hero 31st chapter 117
我ら紅の子弟

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

Archenemy and Hero

第九巻

漫画 原作

石田あきら 橙乃ままれ

キャラクター原案

水玉螢之丞・toi8

コラムページ

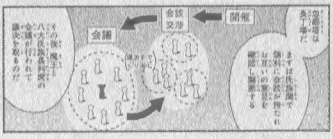
竹之内大輔（レッカ社）

野村昌隆

まおゆう 第八巻のあらすじ

Lectures on Archenemy and Hero
Outline of volume.8

人間と魔族との戦争を真の意味で終わらせようと、ともに歩みはじめた「魔王」と「勇者」。ふたりが人間界の「冬越し村」で活動をはじめてから2年以上の月日が流れ、ようやく人間界にその影響が表れはじめていた。「紅の学士」として魔王が「冬の国」にもたらした数々の技術や知識は、近隣の「鉄の国」や「氷の国」にも伝えられて人々の生活を改善。着実に力をつけていったこれら三国は、「聖王国」の搾取からの脱却を決意して「三国通商同盟」を結成。同盟諸国は「女騎士」が所属する「湖畔修道会」を新たな国教に制定するなど、聖王国を頂点とする中央との対決もやむなしという覚悟で、真の意味での自立をはかるのだった。



こうした情勢の変化に対し、人間界最大の経済団体「同盟」も行動を開始。「青年商人」を中心に小麦を用いた二大通貨制の確立を画策し、さらに「火竜公女」との邂逅を経て魔界との通商を開始するため、直接「火竜大公」との交渉に臨むのだった。

一方、人間界の情勢が動き出したことを受けて、魔王は黒騎士に変装した勇者と「メイド長」をともなって魔界へと帰還。魔族の大会議「忽鄰塔（クリルタイ）」を開催し、八大氏族の長による大部族会議の席上で各族長たちに人間との停戦を訴えた。人間との停戦に難色を示す者が多いなか、黒騎士やメイド長

の助力を得ながら粘り強く説得を重ねる魔王。その甲斐あって会議は人間との停戦に大きく傾くが、あくまで戦争継続を主張する蒼魔王が、典範の前例を根拠に魔王の廃位を要求。会議は振り出しに戻ってしまい、さらに魔王は地位を失う危機を迎えた。

当事者であるがゆえに、魔王は一切の発言を封じられて成すすべがない。もはやこれまでかと思われたそのとき、魔王廃位の決定を行う席上に「開門都市」で人間の代表を務める「東の砦将」が現れる。魔王や勇者が驚きの表情を浮かべるなか、火竜大公に紹介された東の砦将は、「衛門族」の長として大氏族会議への参加を要求。典範の記述に従い、火竜大公と「鬼呼の姫巫女」が後ろ盾となったことで東の砦将は会議の一員となり、魔王はどうにか廃位の危機を脱することができた。

最大の危機を乗り切ったことで、ほっと胸をなでおろす魔王たち。ところが、会議の場から外へ出た魔王のもとに1本の毒矢が飛来。矢を受けた魔王は、その場に倒れこんでしまう——。

魔王

真の意味で魔族と人間との戦争を終わらせようとしている魔族の王。人間との停戦を呼びかけるために魔界の大部族会議「忽鄰塔〈クリルタイ〉」を招集。各氏族の長たちの説得にあたっている。

メイド長

魔王が幼い頃から彼女の世話をしている側近。魔王の幸せを願い、彼女の夢をかなえるために手足となって尽力している。

火竜大公

魔界における八大氏族のひとつ・竜族の長。自身を負かし、約束通り開門都市を取り戻した黒騎士を買っている。

東の砦将

元聖鍵遠征軍の部隊長。開門都市の住民を中核とする「衛門族」の長として、「忽鄰塔」の本会議で名乗りをあげた。

蒼魔の王子

蒼魔王の息子。両目に次期魔王の候補者であることを示す刻印が表れている。蒼魔王に対し、やや不遜な態度が見受けられる。

蒼魔王

魔界の八大氏族のひとつ・蒼魔族の長。王子に刻印が表れたことを受け、一族から次期魔王を輩出しようと魔王の廃位を画策した。

銀虎公

魔界の八大氏族のひとつ・獣牙族の長。強さを至上とする獣牙族を束ねているだけに、銀虎公自身もまた優れた戦士である。

妖精女王

魔界の八大氏族のひとつ・妖精族の長。以前、黒騎士としての勇者に助けられたことがある。人間との停戦にも前向きな平和主義者。

勇者

魔王とともに歩むことを決意した青年。彼女の夢を実現するために各地を奔走。魔界では、魔王の側近・黒騎士として活動しており、「忽鄰塔」でも常に彼女の側に控えている。

女騎士

勇者と旅をしていた仲間。魔王の正体を知りつつも彼女に協力している。魔王とは、恋のライバルであると同時に友人でもある。

女魔法使い

勇者と旅をしていた仲間のひとり。魔王と同じ一族で、強力な魔法だけでなく知識面でも魔王や勇者をサポートしている。

執事

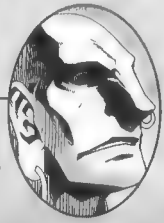
勇者と旅をしていた仲間のひとりで、冬の国の冬寂王に執事として仕えている。現在、魔界に潜入して情報収集を行っている。

鬼呼の姫巫女

魔界の八大氏族のひとつ・鬼呼族の長。人間との停戦に合意するなど、部族会議では数少ない魔王の支持者でもある。

紋様の長

魔界の八大氏族のひとつ・人魔族の長。魔界で最大の勢力だけに個々の意見や立場が多様なため、何事においても中道を第一とする。



巨人伯

魔界の八大氏族のひとつ・巨人族の長。巨大な身体に反して性格は剛と穏やか。ただ、人間に対しては良い感情をもっていない。

碧鋼大将

魔界の八大氏族のひとつ・機怪族の長。人間界の鉱物資源を欲している立場から、人間との戦争に対しては好戦派に属している。

ばキーン
ズ
ズーン
魔王殿が射たれたというのは真実か！
…本当だ
奥で治療をしている
お静かに願いますぞ
…魔王殿は無事なのであろうな

矢は
肺を貫いていた
即死しても
おかしくはない
重体だ
黒騎士の呪文で
命は取り留めたが…
矢には毒まで
塗られていた

紋様の唱え師と
呼族の癒し手に
祈呪をさせておるが
あまりにも
傷が深すぎ
毒性も強すぎる…
なにゆえ…
どこの誰が
やったのだ
忽鄰塔において
魔王が討たれるなど
一度たりとてない

人間
…ですかな
このような方法で
魔王を討った
としても
それは汚名に
なりこそすれ
武名とは
なりません
魔族において
それは
わかりきったこと
であれば
魔王を
討った者として
人間の刺客を
疑うのは必然
そんな…
…いや
さように考える
我らたればこそ
ことさらに
魔族かもしれぬ
「障害が
取り除かれた」
その一事をもって
良しと考える輩
かもしれぬ

黒騎士殿の
魔王殿の容態は…!?
…一両日が峠らしい
!
今はメイド長がついているが…
奥には入らないでくれ
――壊死がひどい

…魔王が倒れたら
次の魔王の選出は
どうなる？
今は
それどころでは…

教えてくれ

…星が
魔王の候補者を
選びます
候補者は
身体のどこかに
刻印が現われる
刻印が
くっきりと
大きいほどに
魔王になる素質が
高いと一般には
言われています

刻印をもつ者が
ひとりであれば
その者が魔王となる
だが
多くの場合
刻印をもつ者は
複数現われる

複数であれば
魔王を決めるための
継承候補者戦を行う
候補者本人
もしくは従者を
代理に立てての
勝ち抜き試合だ
この勝者をもって
魔王とする

…そうか
おい！
どこへ行く
黒騎士殿？
魔王の意に
沿いに行く

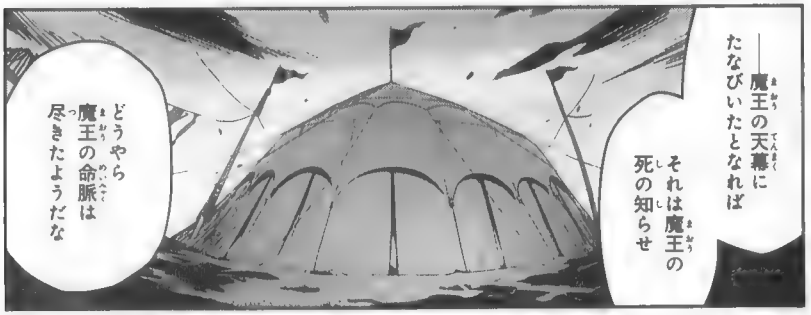
…戦いを止めるには
時を移すわけには
いかない
魔王の命を
燃やす今
その一秒が
――黄金の一粒
より貴重だ
ヒュッ
夢魔蝿
御身の側に
位置の把握は
できたか
北東の丘の
ひとつです
案内しろ
ハッ
ドン

…ここから狙撃したのか
はい
妖精族は氏族を挙げて忽鄰塔会場を監視しております
逃げようとする者がいれば見逃しません
それでいいよろしく頼む
魔王様は…？
危険だ
……！
主上

逃走経路を探索した結果複数の形跡を発見
おそらく犯人は数人から一〇人程度の集団で行動中です
集団なのですね
そいつには聞きたいことがあるいろいろな
…それとおかしな痕跡を発見しました
これは…戦闘の跡か？
わずかに魔力を感じます

「影の中の一矢」
…爺さんか
あぁ
アァ
ヒィィィ
おぉぉぉ
バサッ

黒旗がたなびいたか
黒い旗は族長の死を知らせる弔いの旗


――魔王の天幕にたなびいたとなれば
それは魔王の死の知らせ
どうやら魔王の命脈は尽きたようだな

我らの提案に乗り引退しておれば命永らえたものを
愚かな女だ
失礼します

魔王は
死んだようですね
まったく見事な
タイミングの事件よな
首謀者と祝杯でも
あげたい気分だぞ
お主 何か
知らぬか？
王子よ
さあ？
僕には まったく
見当がつきませんね
ともあれ
ご覧ください
蒼魔王
蒼魔王 十級将軍

魔王の証たる
二つの刻印
その輝きも
増しております
歴代でも
これほどの強さは
なかったでしょう
…蒼魔王子に
称えあれ
これは慶事
我が治世も
ここに完結を
見たか！
刻印の王子を
得た年に
魔王が死ぬ
これも魔界の神が
蒼魔の一族を
寿したもう証！
碧太陽の輝きは
我が蒼魔にこそ
ふさわしい

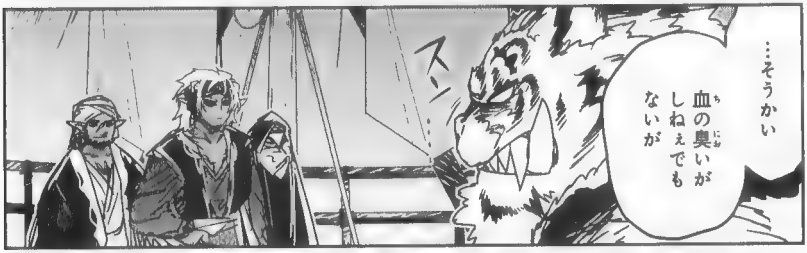
蒼魔一族を
束ねたる重責
この背中に
しかと背負わせて
いただきましょう
——しかし
いつまでも
王子じゃ
格好も
つかないってものだ
……？
……
……
チィィ……

き…
貴様ぁ!?
終わりましたな
新たなる蒼魔王
…いや
刻印王よ
刻印王か…

悪くはないが
別の称号が
待っている
魔王は
この僕が獲ろう
蒼魔の刻印王

お集まりいただいたのは他でもない
不幸な事件により魔王殿が身罷られたのは我らにとって大きな痛手
この窮地を脱するために氏族の長の知恵を借りねばならぬかと思いお招きした次第
お前は誰だ
それに蒼魔王はどこにいるのだ
これは失礼
私は蒼魔一族の兵を束ねる上級将軍
蒼魔一族はこのほど新しい族長を迎えました

我が父
蒼魔王は昨晩
急な発作で
世を去った
父の遺志を受けて
この僕が新しい
蒼魔の長となった
この継承は
蒼魔一族の支持も
受けている


…そうかい
血の臭いが
しねえでも
ないが
スン…

一族の…
決めごと…
そうですな
氏族の内側には
干渉しないのが
我らが習い
それが蒼魔族の
下した決断ならば
しかたなかろう

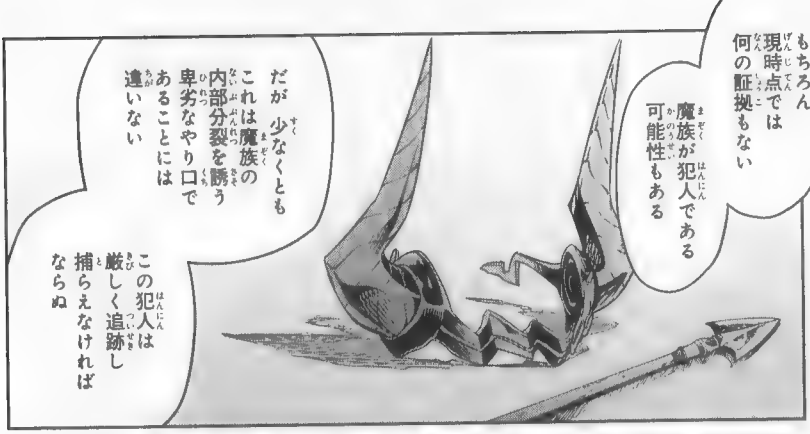
さて
魔王殿が
身罷られたことは
諸卿らもご存知の
ことと思うが
その後の
対応策について
諸卿の意見を
賜りたい
次期魔王の決定に
ついては
星回りが
決めることでしょう？
その時期が
問題だ
今 我らが魔界は
人間界との
戦時下にある
停戦とも交戦とも
結論が出ぬままに
魔王だけが
この世を去った
次期魔王を
得ぬままに
時を浪費しては
魔界の存亡に関わる

では
どうする
魔王不在で
忽都塔を
統行すると？
この九名で
物事を決しよう
というのか
ひとつ諸卿に
報告すべき
ことがある
それは僕の
この両目に
刻印がある
ということだ
両目…に!?
まさか…
通常
魔王の刻印は
ひとつだけのはず

そうだ
僕は
ほぼ確実に
次の魔王だ
いや
現魔王が
死んでいる今
ほぼ魔王である
といっても
おかしくはない
蒼魔族が
確認している
かぎり
現時点で
他の候補者は
存在しない
蒼魔族め…
魔王廃位とは
このような
心算あっての
…いわば
保証付きの
要求だったか
魔王が
廃位されれば
自動的に
蒼魔族から
魔王を出せる
そういう
ことか

だが しかし
現在は まだ
候補者だ
ええ
それは
わかっている
僕とて
若輩の身
諸卿らに支持して
いただくまでは
魔王であるなどと
思い上がりはしない
ふむ
ガヤ
では…
どうしたい…
蒼魔族の長として
魔王の候補者として
諸卿らに言いたいのは
以下のようなことだ

第一に今は
非常事態であり
魔王の空位は
望ましくはない
ということ
早急に
新たな魔王のもと
魔族が結束する
必要がある
第二に前魔王の
葬儀を行うべき
だということ
同時に魔王殺害の
犯人も探さなくては
ならぬ
蒼魔族としては
この暗殺事件の犯人は
人間だと考える
憶測だ！


もちろん
現時点では
何の証拠もない
魔族が犯人である
可能性もある
だが 少なくとも
これは魔族の
内部分裂を誘う
卑劣なやり口で
あることには
違いない
この犯人は
厳しく追跡し
捕らえなければ
ならぬ

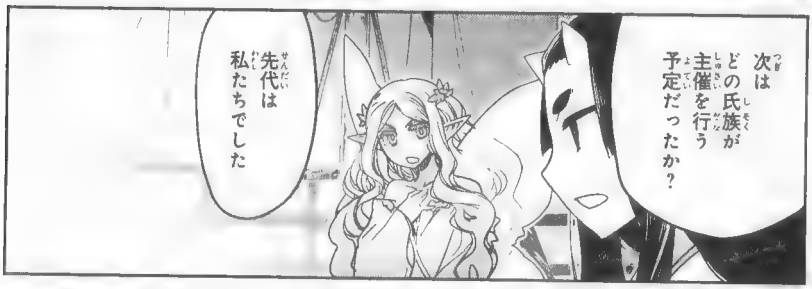
ピピー
人間か…
ギュー…

奴らの
やりそうな
ことだ

第三に
僕はいつまで
待てばよいのか？
ということだ

第一にも
言ったように
今は時間が惜しい
確かに星によって
刻印が押される者が
今後 出るかも
しれないが…

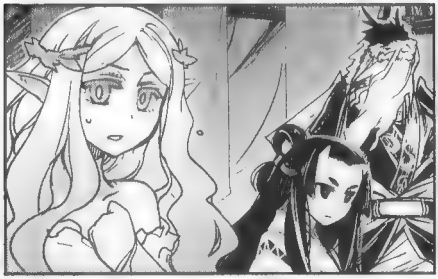
継承候補者戦の時期を決めるのは八大氏族…
いまや九大氏族となったか
その族長の持ち回りであったはず
その決定をお願いしたい

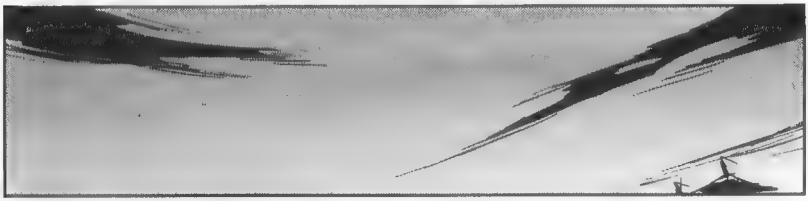

次はどの氏族が主催を行う予定だったか？
先代は私たちでした

であるなら我ら人魔か
どうか決定を下していただきたい

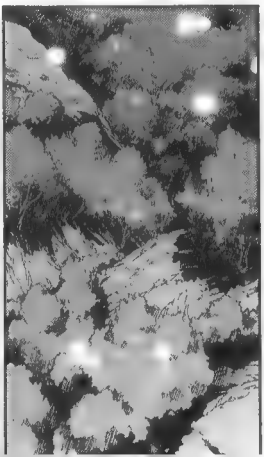
紋様の長
ご裁可を
…今は
危急の時
我らは
新しい魔王を
必要としている
今すぐにでも
明朝
そう――
明朝をもって
継承候補者戦を
行います
その時までに
刻印をもつ
継承候補者が他に
名乗り出ない場合
蒼魔の新王を
魔王として
頂くことに
なります
ざわ…
ざわ…
!
!…

…黒騎士殿
…何用か？
御身は
魔王の片腕
その身体を包む
漆黒の鎧兜は
かって剣の魔王と
呼ばれた覇王を
包んでいたもの
魔王殿が
身罷られたことには
深い哀悼の念を覚えるが
御身は我らが
魔界最強の騎士
悪逆なる
人間の侵攻に
立ちはだかる
最後の砦
なにとぞ
ご自愛くださり
我と共に
この魔界の柱石と
なってくださる
ことを願う





イタ？
ミタ？
イナイー
ミナイー



デモ
デモ
ナンカ
キタ
兵隊ダヨ
兵隊ガ
イルヨ
息ヲ潜メテ
イルヨ
隠レテイルヨ
ゴ注進ダー！
女王様ニ
ゴ注進ダー！
危険ダヨー！
ゴ注進ダー！
女王様ニ
ゴ注進ダー！
谷間ニハ
兵隊ガ潜ンデ
イルンダッテ！

朝…
だ…
ふん
誰も
来ませんね
これだけの
時間では
難しいだろう
黒騎士
そんな鎧
脱いじまえよ
そうですよ
こんなもんでも
魔王に貰った
もんでな

今朝の太陽も
碧の美しい
輝きですな

よいでしょう
仕方ありませぬ
蒼魔の新王よ
前に

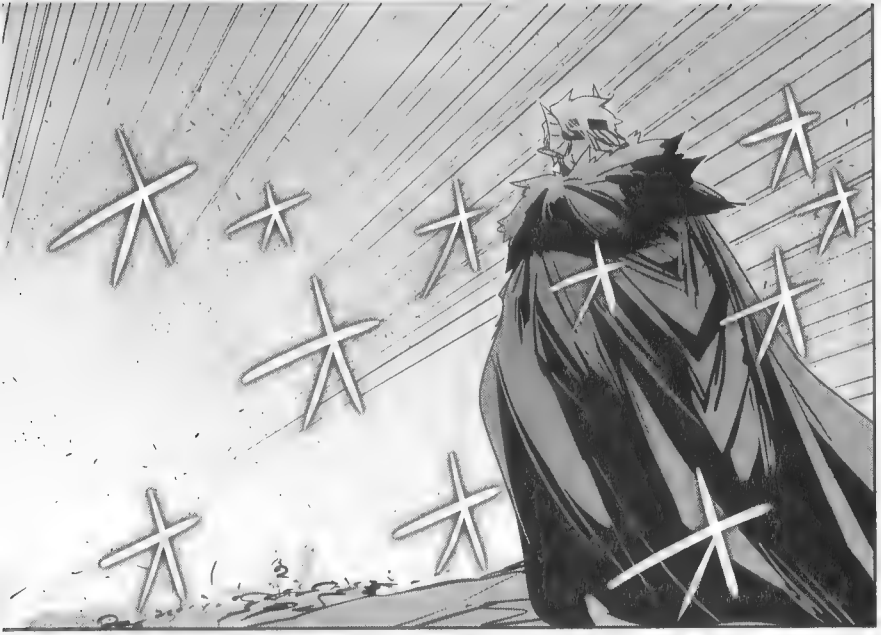
我
紋様の長は
忽郷塔
九大氏族の
代表として
そなたを
最終候補者
として認める
正式に魔王と
名乗るは
魔王城最下層
冥府宮にて
潔斎の四日を
過ごしてからと
なろうが
そなたは これより
魔王として生きる
覚悟ありや？
無論
魔王の
継承者として
その力を
引き継ぐや？
謹んで
では
魔王の
略王冠を…

しばらく
紋様の長よ
なにか？
これより
我が右腕として
この魔界すべてを
統べることとなる
黒騎士に
ぜひ
その栄誉を与えて
いただきたい
ニヤ…
よかろう
では黒騎士よ

我が片腕よ
魔界最高の騎士にして常勝無敗の黒き死の使いよ
我が覇道の片腕としてそなたを迎えることをうれしく思う
そのことだけでも先代には感謝の気持ちを抑えられぬな
この魔界に繁栄をもたらすためにその剣を魔王に捧げ
魔王の命により為すべきを為せ
御命 了承つかまつった
我が神聖なる所有の契約により
我が身命は永世に魔王のもの
我が剣は魔王の敵を貫くものなり
…所有？

我が力は
力弱き民草を
愛する魔王の腕
我が技は
千里を見通す
魔王の道を
照らす光
我が声は
歩み遅き
かの君の伝令
我は
我が力のかぎり
その果てを越えて
魔王と共に
長き道を
歩む者なり

我が手に宿りし
魔王の栄冠
――その呪いを
義務を克己へと
変える君よ
聖なる契約の
名において
我を受け取れ



新魔王ばんざい!!
蒼魔の魔王万歳!!

フシュー
バーサイ
バーサイ

――黒点の名は伊達ではないのですぞ

ザわ
脚が
脚がぁ…
ガあ
ドサッ
ザわ
!?

何者だ！
チャキ
我らが家臣に
何の狼藉を
働く！
静かに
わめきなさい
みっともない
ジュル…
!?

儀礼の最中に
取り乱すなど
王族ともあろう者が
はしたないですぞ
ほ、ほ、ほ
爺さん
遅いぞ
お待たせして
申しわけ
ありません
何が起きて
いるのだ…？

これを
持っていると
確信できる
そのチャンスを
窺っていたの
ですよ

それは！
その瓶は
やめろぉ！

瓶…!?

壊死の毒
ですよ
恐ろしい
毒です
既知の
解毒方法では
効果は望めない

…この毒のせいで
追っ手に差し向けた
私のかわいい部下が
五人もやられてしまった

…そう言えば
魔王殿を射った矢にも
同じ毒が使われていた
ような気がしますなあ
……

なんで魔王を殺したのと
同じ毒使いが蒼魔の陣中にいるってんだ？
それについてはこの暗殺者に問う必要があるでしょうな
放せえ
離いい!!
ぐ…
ガ!!
大事な手がかりを！
口封じのつもりか
とんでもない
これは ご老人を助けようとしただけにすぎません

蒼魔の王よ！
自ら容疑者を捕縛し詮議しなければならぬと言ったそばから
重大な手がかりを握っているに違いないその者を殺すとはいったい何事ですか!?
そうだ信者に浮るにもほどがあるぞ！
!?
カチャ
パサ
この暗殺者は…
蛇蟲族だったのか…
蛇蟲族…？
獣牙の一族だと…？

…違う！
違うんだ
俺たちはこんな
ことはしない！
確かに俺たちは
力を発揮するための
戦場を望んでいたが
暗殺なんぞに
力を貸したりは
しない！
そのようなこと
誰が信じる
それを
言うならば
蒼魔族とて
同じであろう！
そうだ
その蛇霊族を
陣営に迎えていた
蒼魔族も
疑念を
避けることは
かなわぬ！

はははは
言い訳？
疑惑？
ふふふ
何か勘違いを
なさっている
ようですね
僕はね
魔王なんですよ？
唯一にして絶対
至高にして無二
魔界のすべてを
統べる者
今さら そのような
ご託を聞く耳は
ありません

だが魔王は
忽鄰塔において
氏族の長の半数を
もって廃位できる！
このような状況下で
魔王を続けられる
わけがない！
魔王の名において
忽鄰塔の終了を
ここに宣言する
そして
再び忽鄰塔を
招集できるのは
魔王だけだ
!!

宣言しますが
僕は二度と忽鄰塔など
開催しませんよ
こんな会議は
自分の意志を
押し通す実力のない
三流の魔王が頼る
弱者の憂にすぎない
魔界の秩序とは
我が身
この魔王のこと
すべての
法を超えた
支配者が魔王
これで詰み
…お終いですよ
ゴゴゴゴ

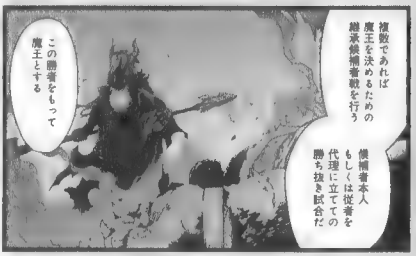
ハハハ
？
そのような
考え方をこそ
改めたかったんだがな

魔王…!?
…ああ
そうだ
私が魔王だよ
蒼魔族の王よ
終 第二十九話 蒼魔の刻印 上

第二十八回

権力の継承について

**国家に君臨する君主にとって
掌握している権力の継承は
非常にデリケートであり
頭の痛い問題でもあった。**



魔王となるには、身体に結印が現われた者同士の戦いを勝ち抜いて実力を示す必要がある。

権力が継承される形

これまでの歴史において勃興してきた国家の多くは、皇帝や王など大権を握る人物を頂点とした君主制が多かった。ヨーロッパでは、世俗の支配者以外にも社会的規範となるキリスト教の存在があり、教会の頂点に立つ教皇も権力を握る存在だといえる。

こうした権力の継承の仕方としては、大きく分けて「世襲制」と「選挙制」がある。世襲制は子供や兄弟といった権力者の一族の者に継承される方法で、権威の根拠として血縁を重視したものである。特に、王が司祭的な役割も担っている場合、王は神の化身や現人神といったように神格化されることが多い。前任者とまったく無関係の者は、正統な後継者として周囲に認められる根拠が希薄なため、血縁に正当性を求めることから世襲制がとられるというわけだ。古代エジプトのファラオは、この代表的な例といえる。

一方の選挙制は、投票によって権力の継承者を選ぶ方法だ。ヨーロッパでは共和制に移行する前の王政ローマをはじめ、神聖ローマ帝国やハンガリー王国などがこの体制をとっていた。キリスト教の教皇も選挙で選ばれており、アジアのモンゴル帝国でも最高意思決定機関のクリルタイで皇帝を選出していた。ただし、こうした選挙の有権者は貴族や特定の氏族など一部の者に限られており、その点で現代の普通選挙とは異なっている。また、権力者の選出においても、有力者のなかでも特に力をもつ者が選ばれる傾向が強く、最終的にはひとつの家系が君主であり続け、実質的に世襲制と変わらないという事態になっていた。

その他、帝政ローマ初期に行われたように、選挙ではなく前任者が直接指名することによって後継者が選ばれ、権力の継承が行われるケースもある。

さて、これらは正常な権力の継承の形だが、ときに反乱や帝位の簒奪などで権力が奪取されることもある。例えば、東西に分裂したのちの東ローマ帝国では、コンスタンス一世を殺害して帝位についたマグネンティウスをはじめ、何人もの皇帝が簒奪を行った。また、モンゴル帝国で起きた帝位継承争いのように大きな戦争が起こることもあり、権力の継承は為政者にとって悩みの種でもあったのだ。

蒼魔の十子に暗殺された蒼魔一。こうした力による簒奪も、権力継承のひとつの形だ。

想いめぐる

お姉ちゃーん？
お姉ちゃん！
もう
お姉ちゃん
ぼうっとしてる
あ
うん
ごめんや
ね
ここでの
暮らしは
楽しい？
毎日楽しいよ
お仕事大好き！
暖かいし
お布団は
柔らかいし
毎日ちゃんと
ご飯食べられるし
当主のお姉ちゃんも
メガネのお姉ちゃんも
勇者のお兄ちゃんも
好きだよ
そう…よね
お姉ちゃんも
大好きだよ
お姉ちゃんが
いちばん好き
…うん
私も
大好きよ

なぜ！
なぜ貴様が生きている！
『なぜ』とはご挨拶だな
それほど使った毒に自信があったのか？
このとおりピンピンしている…とは言いがたいが健在だぞ？
魔王の地位を譲り渡すつもりも無論ない
まおゆう
魔王勇者
第三十話

学士殿…
すまなかった
疑った
しかし
信じて
くださった
勇者が真剣に
言うからな
あの爺は
D以上は絶対に
殺さないんだ！
私は紳士で
通っていますからね
にょほほ
ほほほほ

第三十話 Archenemy and Hero 30th chapter

魔王が…本当の勇者だよ

俺の剣は
魔王のもの
俺の剣は
魔王の示した
ものを貫く刃
す……
蒼魔の王を
捕らえよ！
手向かいするなら
容赦するな！

舐…
めるなぁ！

ふざけるな…
くだらない茶番だ
魔王にふさわしいのは
この我しかいない
この両目に宿った
刻印を見ろ
我が力は
その女よりも！
どの氏族長よりも！
はるかに強いのだ!!
だが
魔王じゃない
お前は まだ
魔王の候補でしか
ないんだよ
…ならば
実力をもって
魔王となろう

魔王を
討ち取れッ!!

ドドドドド
・・・ハッ
強いなァ黒騎士!!
さすがは魔界最強の武力!

ドォン
楽しいなァ 黒騎士!!
こいつ…
強さだけなら 本物の魔王並か……!
ドォン
キン
キン

主上を
護るために
押し通る！
邪魔をするな！
カカカカ
通サヌヨ
コノ魔界ハ
我ガ主ノモノト
ナルノダ
死人猫
クソッ
こんなに兵を
伏せてやがったのか
キリが
ないですね
弓兵隊 構えッ
魔王を狙え！

…射てェ!!
ドッ
ドサッ
?
……
うぅ
ああ
射たれた…のか
いったい誰が…!?
あいつか…!

この戦場でおっぱ…
…魔王殿に弓を向けるものはこの私が相手です
あんな目立つところでふざけやがって…
あのジジイを狙え！
ドドドドドド
……
二流の下というところですな

あの爺さん
何やったんだ？
射撃で
倒したんだろう
伝説の「弓兵」
じゃないのか!?
何も持ってなかったぞ
あの爺さんが
何か持ってる
ところなんて
見たことがない
なんで
「弓兵」なんだよ
相手は 矢に
射貫かれたように
死ぬからだ

さすがだな
黒騎士
これほどだとは
思っていなかったぞ
だが
ここまでだ!!
大規模
破壊術式…!!
味方ごと
この場すべてを
焼き払う気かッ

させるかぁ!!

ゴオオオオオオオオオ
ハアハア
フフフ
ハアハア
我ガ主(アルジ)
ソロソロ…
ヒュ
ああ

…兵を退かせよ！
退却だ！
ドドドド
命拾いをしたな
魔王は護った
俺の勝ちだ

これは新たな戦乱の始まりにすぎぬわ
誇るがよい一時の延命を
すぐに それは地獄の開幕だと気がつくだろう

それで魔王殿の容態はいかがなのだ？
一命は取り留めるだろうが
二週間は絶対安静だ
その後も数か月は不自由だろうな

忽鄰塔会場
魔王城
刻印王
伏兵
至蒼魔領
蒼魔族は どうやら
付近に相当数の軍勢を
伏せていたようです
そちらと合流して
領土へと帰還する
進路をとっています
蒼魔族は？
蒼魔族の
大会議に対する
裏切りは明白だ
…裏切り
…よくない
きゃつらとの
決着をつけるべき
時が来たか
現在 魔王は
病臥中だ
その判断は
いま少し待つべき
かと思う
今回の
忽鄰塔に
あたって
蒼魔族は 独自の
予定や策謀をもって
動いていたという
印象を受けた

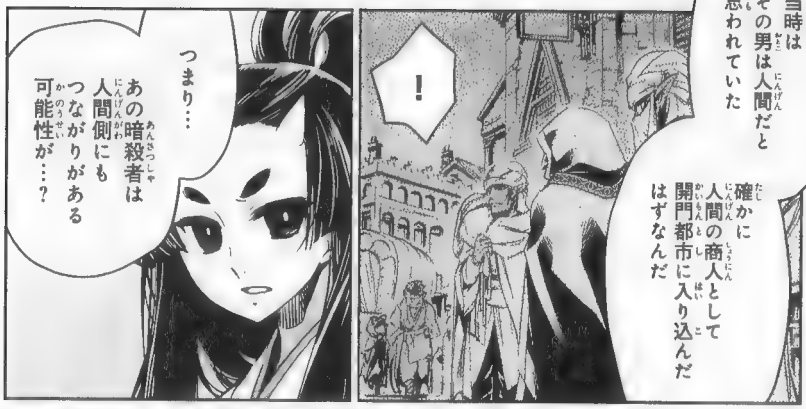
であれば
現在の逃走も
何らかの思惑が
あってのこと
だと思われる
安易に追うのも
危険…か
暗殺者についても
詮議をせねば…
獣牙族は
無関係だ
獣牙の蛇蟲族が
裏切りに加担して
いたのは明白
今さら
そのような
申し開きを
信じよと？
獣牙族への疑いは
免れえませぬ
我らは
裏切り者
ではない
本当だ
信じてくれ！
！
待てよ
そういえば…

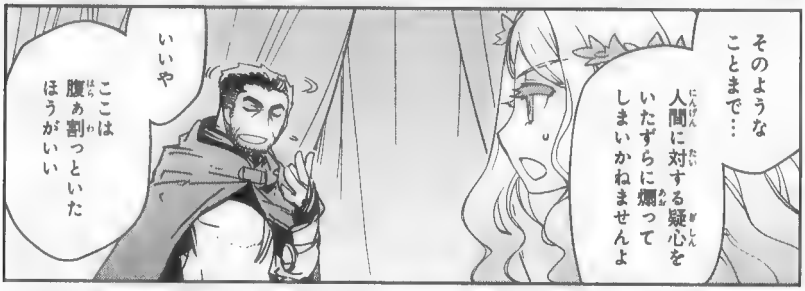
暗殺の容疑者について
思い当たる節がある
ざわっ…
なんだと？
もう ずいぶん前の
ことなんだが…
魔族が地上に
軍を派遣するよう煽る
文書が押収された
その直後に
蒼魔軍がゲートを越え
地上に侵攻したんだ

えっと
その商人は
たしかに
蒼魔族の人と
会ってました…

なんか
その…
呼吸音が
ヘンで…
漏れる
ような…
蛇みたいな…

そこで捜査線上に
浮かんだ人物が
「蛇のような
呼吸音をさせる男」
結局 捕まえることは
できなかったんだが…


当時は
その男は人間だと
思われていた
確かに
人間の商人として
開門都市に入り込んだ
はずなんだ
!
つまり…
あの暗殺者は
人間側にも
つながりがある
可能性が…？


そのような
ことまで…
人間に対する疑心を
いたずらに煽って
しまいかねませんよ
いいや
ここは
腹ぁ割っといた
ほうがいい

俺たちゃ
どう あがいたって
新参なんだ
隠し事なしで
知恵を借りたほうが
いい結果もでらぁ
そうか…
うん
そうだよな

ギ
み…
おい…？
黒騎士様…？
その風貌は…
人間…
黒騎士が人間…？
俺は かつて「勇者」と呼ばれていた男だ
!!

な!?
勇者ですと!
魔族の宿敵
最強の人間!
その強さ
その魔力
やはり
そうであったか!
万機千刀の
猛者
我が眷属一〇〇〇を
たったひとりで
屠ったという
あの勇者か!?
ゴオオオオ
そうだ
…すまなかったな
あれは
戦争だった
綺麗事は
言わない
多くの魔族が
俺に恨みを
もつのは当然だ
俺が倒した
その勇者が
なにゆえ
黒き鎧を着る?

人間は魔族と
永く激しい戦争を
続けていた

俺が物心付く
前からだ

俺にとって人間と
魔族が争っているのは
当たり前のことだった

俺は人間を
救うために
魔族と戦い

いつしか
勇者と呼ばれる
ようになった

だけど
俺がいくら戦っても
たくさんの魔族を
倒しても

戦争が終わる
気配はなかった

戦争を終わらせて
人間を救う

その方法が
当時の俺には
ひとつしか
思いつかなかった

魔族の王
魔王を殺すことだ

三年前の秋
俺はひとりで
魔王城に忍び込んで
魔王城のなかを
奥へ奥へと
進んでいった
そこで魔王と
出会ったんだ
会った瞬間に
わかった
こいつは
そこらの魔族より
格段に弱いって
でも
あいつは
たったひとりで
俺を待ち構え
たったひとりで
俺を迎撃した
必死で
剣を交える
以外のことを
しようとした
言葉を尽くして
信念を…
自分のすべてを
懸けた
今なら
何となくわかる
あの時あいつが
死んでいたら
魔界がどうなったかも
人間の世界が
どうなって
いたかもな

あいつの言葉によれば
ふたつの世界は互いの存在に依存している
互いに憎しみあい
争いながらも互いの存在がなければ成立しないんだ

人間世界には疫病と飢餓という問題があって
食料が足りなかったりして人が飢えて死ぬ
それを まあ——
言葉は悪いがごまかすために
魔族との戦争を決意した節がある

一方 魔界は血みどろの乱世だった
争いをやめようとしない魔族同士を結束させ
まがりなりにも未来を見つめさせるために
人間との戦争は有用だった

魔王は それが
イヤだったんだな
魔族は…人間は
自分たちが
生まれてきた意味は
そんな潰しあい
ではなくて
もっと他にも
あるんじゃないかって
そう信じた
かったんだよ

だから人間の勇者…
自分を殺しに来た
俺に向かって
「そんなことは
やめよう
もっと別の
結末を見に行こう」
そう言ったんだ

俺は勇者
人間を救う英雄
そう おだてられて
魔界へ攻め込んだ
ただの殺し屋だった

でも
魔王は違う
魔王は真剣に
考えてた
自分にできる
どんな手でも使って
魔界を救おうと
考えていた

魔王が…
本当の
勇者だよ

別にあいつは戦争も争いも否定したわけじゃないぜ？

ただ なんて言うのかな…

今の「これ」はあまりにも不自然だ

歪んでいる

どこにもたどり着かない

そんなことが言いたかったんだと今の俺は思ってる

あいつの考える「豊か」とか「平和」ってのは決して 争いのない楽園じゃないよ

…ただ 争いが自らを滅ぼさず未来へ[redacted]が[redacted]ってことなんだと思う

ええい

私がいないところで余計なことを…

無理は禁物ぞ！
魔王殿！
大丈夫なのですか!?
見てのとおりのざまだ
…やはり戦闘のできないそのツケが回ってきてしまった
笑ってくれ
いや
魔王殿
笑う者などいようはずもない

…体力がもたない
手短に済ませるとする
よい機会だ
私は 魔王としての
権威を一時
この会議に預ける
!?

そもそも
この「魔王」という
統治機構自体が
過渡期的性質を
もっているのだ
魔王の身で
こんなことを
いうのもなんだが
たったひとりの
絶対者の権威と武力と
調整力によって
氏族間の
意見の相違や
バランスの欠如を
すべて吸収させよう
…などという
考えそのものが
前時代的極まる
火竜大公
会議の議長を
お願いしたい
――承った
妖精女王
九大氏族以外の
小氏族のことも
気にかけて
やってくれ
はい

重大事については
過半数の賛成をもって
決とするのが
よろしかろう
ただし
万端に配慮し 交渉を
尽くしてほしい

魔王！
魔王殿！

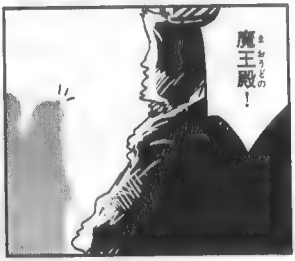
二月 三月も
あれば戻る
それまで…

獣牙族は
今回の件には
無関係だ
我らは暗殺などという
卑劣な行為によって
武勲を得ようだなどと
考えたことは一度もない
俺はよい
…しかし
我が氏族に
不名誉を
与えないでくれ
この雪華山の銀虎
切に お願い
申し上げる…
銀虎公
頭を上げられよ
銀虎公と
獣牙の一族を
疑ったことは
一度もない
!
それよりも
私自身が
氏族の長がたに
詫びねばならぬ

偽りの死をもって
長がたを謀った
ことについてだ
ゆえあって
とはいえ
誇り高き大氏族の
長がたを騙し
偽るような
仕儀となって
しまった
すべては私が
長がたの信頼を
得るために
すべきことを
しなかったため
起きたこと
自身ひとりで
すべてを進めようと
傲慢にも思って
いたせいだ
…すまなかった

いや
魔王殿は
その器を
示された
…もう
…小さいとは
見えぬ…

我ら一同は
魔王殿の帰りを
待とう
ここはまかせて
身体を労ってくれ
何かあれば
至急 お耳に
入れましょう

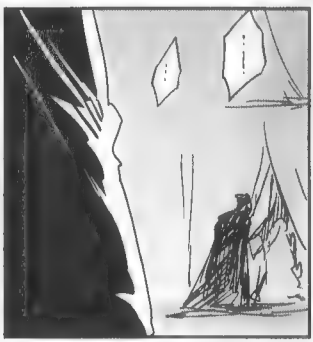

魔王殿！

我と我が一族は
魔王殿に大きな
恩義を負った
戦場において
魔王殿の命を
三度庇うまでは
この恩義は消えぬ

我ら獣牙の一族は
魔王殿に従い
常にその身命を
護る盾となろう

ふらっ
ありがたい…
ことだ

まおー様！
バカ
無理をするから…
バヤシ
なんだ


……

魔王殿不在の忽鄰塔とは
これは大きな課題を残されたものだ

…それにしても魔王殿と勇者か

魔界 数千年の歴史においても
このような出来事が起こったことがあっただろうか

この火竜大公
まだまだ 見たいものが
できてしまったではないか

…そういう事情でしたか
やっぱり聞いていたか

あー…
どうされました？
やっぱ
あれだよなー
俺って人間の
裏切り者だよな？
さようですなぁ
大陸一の賞金首は
固いところですな
魔族のなかでも
外様もいいところ
じゃね？
魔王直属の
黒騎士だから
見逃してもらえて
いるけど
勇者といえば
魔族の仇敵ですからな
手を組んだ魔王殿の
立場も危ういかと
あー…
……

好かれるために
勇者をやって
いたのですか？
みんなに認めて
もらうために
戦ってきたのですかな？

それは違う
みんなを
世界を
救いたかった
からだ

では
勇者のままで

そのままで
よいでは
ありませんか

世界を救うのが
勇者の仕事
なのでしょう

人間界も魔界も
ひとつの
世界だった…

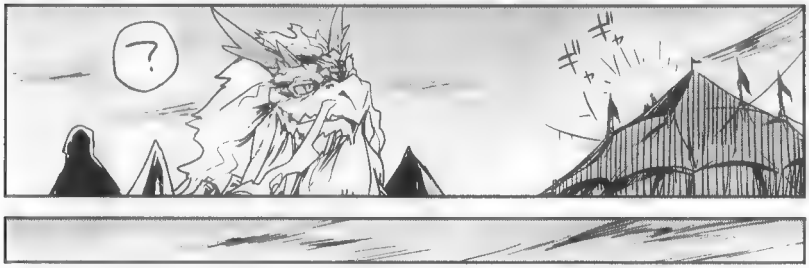
ならば
勇者のまま 世界を
救えばよいのです

ちょっとだけ
「みんな」が多く
なった…

それだけのことでは
ありませんか

爺さん…
それに
素晴らしいことも
あるでしょう
？
揉んだの
ですか？
へ…？
揉んだのですか
あのふよんふよんの
大質量を！
心躍る魅惑の
楕円回転運動体を!?
小悪魔的に跳ねまわる
ワガママな
たゆたゆおっぱいを！
いや…
機会が
なくて…
とんだ
腰病勇者ですな！
にょほほほほ
ガチャ
は…
はさんだし…
なんですと!?

裏切り者決定ですな
なんだよ!?
言ってることがさっきと違うじゃん!?
ギャーギャー
人間世界のではなく男性の裏切り者ですぞ!


?
ギャ
ギャ

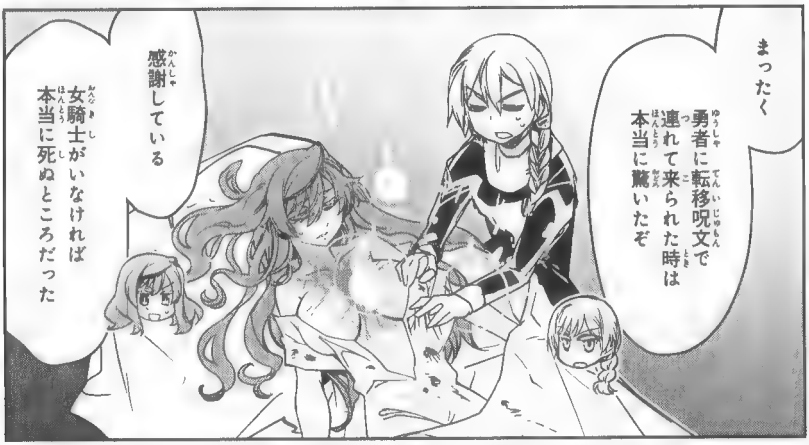
まったく無理ばかりして…
しっかり安静にしてください
あの状況ではしかたがなかったんだ
ケホ
ケホ

そうだ
そうだー
魔王
反省しろー
ゴッ
お前もだ
勇者！
勇者だから
死ななかった
ようなものを
お前だって魔王に
負けず劣らずの
重傷だ
ぶおおおお
治癒の通りが
悪いな…
密度の高い
攻撃魔術
受けたからなぁ
このクラスになると
ダメージと呪いとを
一緒に撃ち込まれた
ようなもんだ
回復能力や
免疫系まで
狂わされる

あやつは…
強かったのか？
うん
まぁまぁかな
確かに
すさまじい
強さだったが
勇者の本気って
あんなもの
だったか？
手加減して
いたのか？
体調でも
悪かったか

すまん…
死んだふりするために
治癒術を一時的にせよ止めるなんて！

それにしてもまおー様
いくらなんでも今回は無茶が過ぎましたよ


まったく
勇者に転移呪文で連れて来られた時は本当に驚いたぞ
感謝している
女騎士がいなければ本当に死ぬところだった

私もしばらくは魔王城へとやっかいになる
二人の治療のために
まだまだ予後が不安定だ

おお
さんきゅな

しかし
困ったな
どうした？
これでは
勇者をもふもふ
できないぞ
がく…
そうだな
まぁ
しかたないだろ
私はできるぞ？
もふ
もふ
なんだと!?
あらあら
そんなこと
私だって
できますよ
なでなで
ちょ！

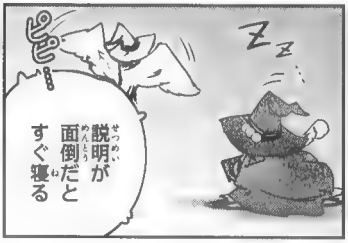
多少
爛ったほうが
魔王様は
早く完治しそう
ですからね
これも
治療の一環
ということだな
そんなわけが
あるかー！
おお
もう
こんなに元気が
…足りない
…まだ
足りない

ご主人
ピィ
ご主人
ピィ

そんなにしたら
倒れちゃいますよう
ピィ
でも
足りてない

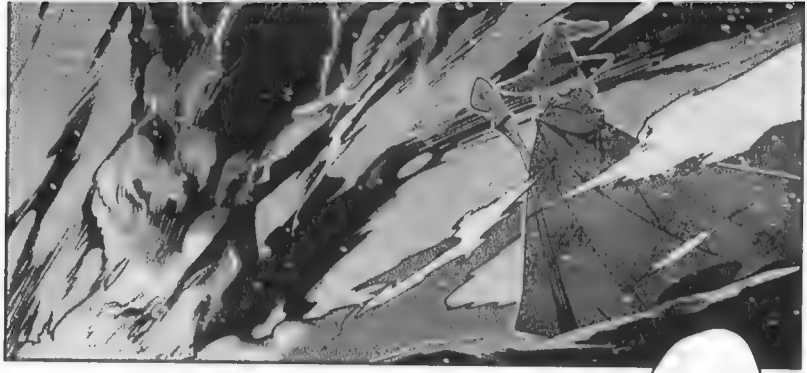
ご主人
最強じゃ
ないですか
ピィ
なのに なんで
そんなに魔力を
貯めこむんです？

ピ…


Zzz
ピピ…
説明が
面倒だと
すぐ寝る

…うるさい
ピィ
やめて！
ピィ
フライドは
やめて！
ピィ
せめて
タツタにしてぇ！

瀬良は昴
昴は統ばる
その意は
集合
束ね
ひとつになる
結束点
収斂の先
収斂とは
常に一点
それが
なぜ
ふたつも？
？
？
ピィ
ピィ
「よき問いは
常によき答えに
勝る」
それを
問うべき
…足りない
…まだ
足りない
ズズ
ズズ
そんなに鍛えたら
また倒れちゃい
ますよぅ！
ピー
ピィ
もうごめん
ですよう
あんなに血を
お吐きになって！
ピィ
ピィ



…勇者と
約束をしたの

…私は
絶対に
退かない

終 第三十話
嘘つかい 本当の勇者だよ

第二十九回

政治体制の移り変わり

王に権力が集中する絶対王政は封建社会から民主社会に移る過渡期に登場した一時的なもの。いずれは崩れる宿命だった。

王権力が強い絶対王政的体制は、民主的な議会政治誕生前に登場する過渡期的な体制なのだ。

絶対王政の成立と市民社会への移り変わり

皇帝や王に対する一般的なイメージは、強い権力を背景として国家に君臨するといったものではないだろうか。こうした君主の姿は「絶対王政」や「絶対主義」と呼ばれるもので、16世紀から17世紀にかけて見られる。ただ、いわゆる中世の時代には「封建制」がとられるようになっており、君主と地方領主である貴族や騎士たちとの関係は双務的で、君主の支配力はそれほど強くなかった。のちに、発達した貨幣経済の影響で農奴が裕福になりはじめ、独立自営農民へと変化していったことや、ペストの流行によって農業人口が著しく低下したことなどにより、封建制を支えていた荘園経済が崩壊。生活が立ち行かなくなった諸侯や騎士が没落して王の臣下に加えられていったことで、政体も封建制から絶対王政へと移っていくこととなった。

絶対王政では、それまで諸侯や貴族、教会などが握っていた権力が君主に集中したことで、王権が大きく強化された。王権の根拠としては「王権は神に授けられたもので、人民は国王に逆らえない」とする王権神授説や、民が庇護を求めて自発的に王に服従・統治契約を結んだとする社会契約論などが登場している。

ただし、王がやりたい放題だったわけではなく、統治は貴族や商工ギルドといった団体の協力が不可欠だった。

このような経緯で誕生した絶対王政だが、その期間はせいぜい200年間ほど。千年以上も続いた封建制に比べれば、ごく短い間だった。これは、諸侯や貴族などの特権階級にかわって台頭した平民勢力が、それだけ急速に伸長したためだ。

一部の市民による政治への参加は、1300年初頭のフランス三部会などですでに足がかりができていた。産業の発達や大航海時代の始まりによって、裕福な商人を中心とした市民の発言権が拡大。さらに、17世紀になって人間の理性に光を当てた啓蒙思想が広まると、王権の根拠に対する論議が盛んになり、王権の打倒までを考える革命思想が誕生する。

その結果、イギリスでは17世紀なかばの清教徒革命やその後の名誉革命を経て「立憲君主制」に移行。フランスでも18世紀末に起きたフランス革命で共和制に移行し、以後は市民が政治の主役になっていったのである。

魔王の権威が会議に移ったことで、会議の参加者は自分の考えと会議の決定に責任をもつ必要が生じた。

明日へと続く道

珍しくお疲れのようだな
ええ…
慣れないことはするものではないですね
首尾は上々だったんだろ？
魔界での販路確保のために竜族の協力をとりつけて
問題は　それ以外のところでしてね…
そちらはどうです？
ああ
開門都市からゲート跡地には古い街道があったようだが今は使い物にならん
開門都市も城壁の破損が多くて防備に不安があるな
…なにより地上と地下をつなぐ大穴だ
ここを地上との交易拠点にするにはちと大変そうだぞ
予算はいくらでもつけます
…が
問題はその大事業を担う人物がいないことですね

まおゆう
魔王勇者
第三十一話

それにしても…
この神殿
見事なもんだなぁ
二本の河と
都市を囲む
九つの丘
その丘の上に
建つ神殿
この都市を
考えついたのは
相当な才覚の
持ち主だぞ
城壁も さまざまな
攻撃に備えた
構造になってる
造られた時代が
そうとうちがうのか
いろいろ変わってる
みたいだけど…
こっちが北だから
こんなもんかな
だとすると…
こんなふうに
街道があるけれど
本来は この山を貫く
街道があっても
おかしくない
いや むしろ
南へ伸びる動脈が
必要なわけで
そうじゃなきゃ
辻褄が
合わないだろう
つまり
この都市の
本来の正門は
南門になるのか…？
でも 街道が…
ありますよ

第三十一話 Archenemy and Hero 31st chapter

我ら紅の子弟

街路に興味があるんですか？

ああ 俺は土木屋なんですよ

土木？

聞き慣れない言葉ですよね

堤防や街道を造ること
防壁や城を造ること
水を活かして農業に用いる水利を図ったり
木を植えたり

災害に備えて山の形を変えたりもします
そういう ひとりの手には負えない大きなものを造るのが俺の仕事なんですよ

街道も？

街道もですね

道なんて放っておいても歩きやすい場所には自然に でき上がっていくものです

多くの人が行き交えばすなわちそこが道になる

だけど考えて造るとなるとこれは なかなか奥が深いわけですよ

橋なんてどうです？
ああ
橋も重要ですね！
橋というのは橋梁とも呼ばれていて
人や物が谷・川・窪地などを乗り越えるための構造物です
人が渡るものを「橋」水を渡すものを「水道橋」なんていいますね
木造の橋も角いけど石造りのおや主流かな
いやまてよ…二の時代…
いやもっと先の時代なら鉄で橋を作ることもありえるぞ…
ガリ
ガリ
たとえば金属でロープが作れれば
いきざまにない構造が造れるかも…
となると強度面で……負荷……
もしもし？
あ！すいません！
こういうことだったら夢やに
橋と街道に興味がおありなら
一度私どもの仕事場を見に来ませんか？
仕事場？

今 まさに
橋を架けようと
しているところです
天と地が反転する
ような場所に
誰も見たことのない
橋を…ね

お集まりの族長方
ご足労に感謝する
さて 魔王殿から
一時でも その全権を
預かった以上
その信頼に
応えるためにも
我らは この会議を
滞りなく
しかも 遺漏なく
やり遂げなければ
ならん

目下 もっとも
急を要するのは
蒼魔族の問題

まずは その問題を
整理してみますか

ひとつ
蒼魔族は
新しい王を
迎えた

ひとつ
その新王に
率いられた軍は

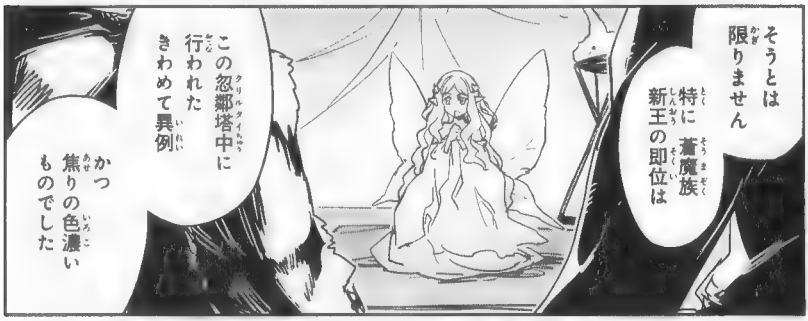
魔王に向かって
弓を引き
忽鄰塔を
離脱した

ひとつ
その新王
および 彼に
率いられた軍は

現在
彼らが領土に
向かっている

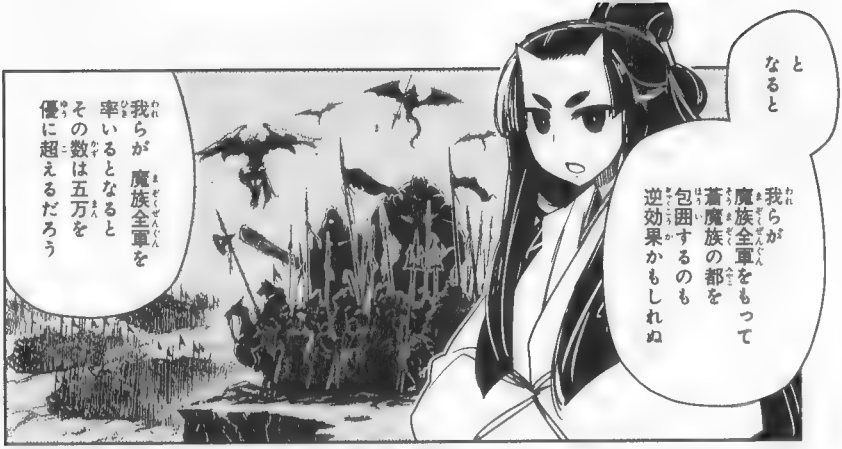
その数は
約一万数千

と なると
問題は…
蒼魔族全体の
意志ですね
は？
蒼魔族は
裏切り者
だろうが？


そうとは
限りません
特に 蒼魔族
新王の即位は
この忽郷塔中に
行われた
きわめて異例
かつ
焦りの色濃い
ものでした

魔王と忽郷塔に
弓引く行為…
新王と側近の
独断であったとも
考えられましょう？
うむ
ことによると
蒼魔族の本国は
新王が魔王を
裏切ったことを
まったく知らぬ
可能性もある

それは我には明らかなように思われるな
どういうことです？ご老公
自らの領土に向かう蒼魔族の行軍速度が速すぎる
先回りどころか追撃もできぬ
この行軍速度が語ってくれているであろう
蒼魔の軍は我らには是が非でも追いつかれたくはないのだ
戦闘になっても自らの領土から援軍が来るのであれば
ここまでがむしゃらに自らの都に急ぐ必要はあるまい
つまりきゃつらも己の都を掌握はできていないのではないか
なるほど
一理ありますね


とな
ると
我らが
魔族全軍をもって
蒼魔族の都を
包囲するのも
逆効果かもしれぬ
我らが
魔族全軍を
率いるとなると
その数は五万を
優に超えるだろう

そこまでの数を
揃えてしまうと
蒼魔の一族には
絶望が広がる
魔王に
反逆をしたのが
新王だろうと
何だろうと
すでに自分たちは
魔界を裏切って
しまったのだ
…とな

となると
これは自暴自棄と
いうか
蒼魔族は すべて
追い込まれた
狂狼となり
もはや 新王に
協力するしか
ないであろう
血を見ずには
すまぬ

蒼魔の軍が自らの領地に帰り着くのは避けられまい

これは すでに過ぎたことと しよう

今 もっとも恐ろしくこちらがしてほしくないことは

蒼魔の軍が蛇のようにこの魔界の中を動き回り

哀れな犠牲者に噛みつくことだ

蒼魔一族の領土の外には偵察を張り巡らせ

蒼魔の軍の動きをいち早く掴む必要があるだろう

その役目は我ら妖精の一族が受けましょう

我らは小さく力も弱いですが

夜の闇も見通し小さな音も聞き逃しません

もし妖精の一族が何かを見つけたのなら

我ら人魔が一族がその情報を 魔界の各地に届けましょう

人魔一族は氏族のなかでもっとも数が多く

古来より我らはこの魔界のなかに伝令の「駅」を造り

換え馬による情報のやりとりをしてきました

蒼魔族が 軍を 発してきた 場合は…
先鋒は 俺たち獣牙だ!
俺たちは 今回の件では 大きな 不名誉を負った
是非 先陣を 務めさせて いただきたい

よかろう 先陣は 譲るとしよう …しかし
鬼呼の平原
蒼魔の地
蒼魔と一番 長い国境を 接しているのは 我らが鬼呼族の地
ゆえに 我らが 第二陣だ

蒼魔族が 我らの地に 突っかけてきたら 先陣を保証する ことはできぬ
我らとて 自らの国や民を 護らねば ならぬでな その時は 諦めてくれ
承知した

もう二点
お願いしたい
ことがある
そいつは
流民のことだ
あちこちの街に
少数だが暮らしている
蒼魔族がいるはずだ
そいつらの保護を
お願いしたい
なぜ そのような
細々とした
ことを？
たいした
人数でもない
ではないか
形勢に影響を
与えるとも
思わん
戦に関しちゃ
そのとおり
だが
こいつは戦が
終わったあとの
ためだよ
俺たちが蒼魔族を
よってたかって
滅ぼしたのでは
「ない」ってことを
誰かに
証人になって
もらわなきゃ困る

今回の戦にしたってそうだ
この世界から蒼魔族をひとり残さず女子供も皆殺しにするわけにはいかないだろう
そんな無法はとおらないからな
もし そうした場合生き延びた蒼魔族は俺たちを恨むぜ？
ことと次第によっちゃあ
「何もしていない蒼魔族を恐れた他の氏族が陰謀によって蒼魔族を包囲攻撃した」
…なんて子々孫々まで語り継ぐことになる
ほう…
もう一点は？
蒼魔族以外…自分の氏族の領民の安堵だ

民にとって
一番ツラいのは
「何をやっているか
わからない」ことだ

自分たちの国や軍が
何をやっているか
わからないと
自分たちでは
何の手も打てない
気分がして

自分が無力で
とるに足りない
ちっぽけな
存在にすぎない
という気分になり

だんだんと
腐ってゆく

こいつは
街も人も産業も
腐らせるぜ？

そうなったら
街はヒドい
ありさまになる

ボロ

ギロ

ゆー

フム

何が起きたから
こうなって
この状況は
どれくらい
ヒドくて
また どれくらい
希望があって
どういうふうになれば
解決するんだってことを
教えてやらなけりゃ
ならない
まぁ
ことが戦だ
全部
教えるってわけにも
全部 真実ってわけにも
いくまいが…
ふむ
つまりは
こういうこと
だろう？
すべての民は
戦場へ出る
出ないに関わらず
戦士である と
将軍ならば
士気を鼓舞するのも
その手腕である…と
そうそう
そういうことだよ
虎の旦那

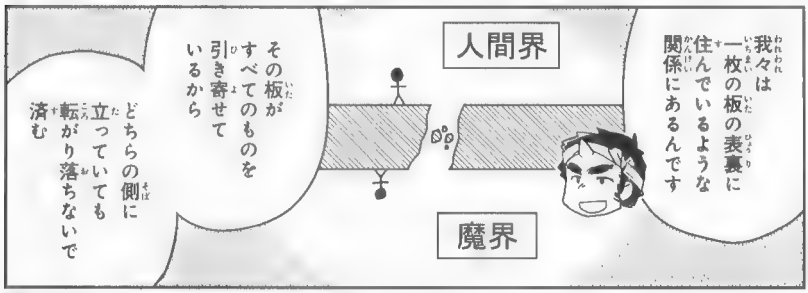
まずは
大きな声で
知らせる…
そうだのぅ
「蒼魔族の新王が裏切り忽鄰塔を襲った」
という事実を領民に告げるとしよう
そして戦に怯える領民には
「蒼魔族は領地へと戻ったために
当面 皆が住まう場所は安全である」
ということを伝えるのだな
念のために警備兵の増強なども進めてゆくという
いわば 根回しを領民にするには
よい機会だろう
妥当な対応でしょうな
砦将…
こいつの読みや着眼点ってのは切れ味あるな

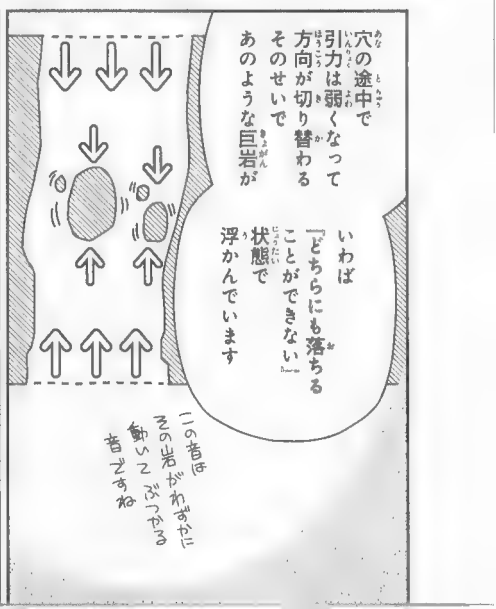
だが
そうとなると
我らが
蒼魔族との一戦に
どのような決着を
望んでいるか
重要になるだろう
…決着
蒼魔族が自分の
領地から出てきた
ところを叩く
あるいは
こちらから攻め込んで
蒼魔族領を征服する
我々がどうする
べきなのか
最終的には
どのように
なればよいのか
――あるいは
魔王殿は
我ら自身に
我らの未来を
考えさせたかった
のであろうか…
戦の決着については
それぞれの氏族が
よく考えて
その考えを
持ち寄る必要が
ありますね
では
当面の蒼魔族への
対応はそのようで
蒼魔の動きは
途切れず報告を
入れあうとしよう
…

では
今回の会議は
これで終了とする
何もなければ
次の会議は
四〇日後と
いうことに
そういえば
魔王殿の
様子は？
ベッドから
出ることは
できないが
口先だけは
元気になって
きているよ
そいつぁ
よかった
今日の
会議の結果も
さっそく伝えよう
あいつは？
現場でしょう
いつもの…

それにしても
壮観ね！
ええ
何回来ても
目が
眩んでしまいます
なんで
あんな
巨大な岩が
浮かんでいるのかしら？
そうか
この島は
不思議
ですよねぇ

おお
来たのか
ひどい顔！
また徹夜したの？
土木馬鹿
こんな
すごい場所
なんだぞ？
わくわくして
当然だろう？


人間界
魔界
我々は
一枚の板の表裏に
住んでいるような
関係にあるんです
その板が
すべてのものを
引き寄せて
いるから
どちらの側に
立っていても
転がり落ちないで
済む


穴の途中で
引力は弱くなって
方向が切り替わる
そのせいで
あのような巨岩が
いわば
『どちらにも落ちる
ことができない』
状態で
浮かんでいます
二の音は
その岩がわずかに
動いてぶつかる
音ですね

なるほどねー
…って
説明はいいけど
予定はたったの？
ああ
図面も工程表も
できてるよ

え？
言わなかったっけ？

地質も調べて
いくつかのルートを
考えてみたんですが…
この赤い線の
ラインならば
工期は約四か月
造る橋は十二
一箇所が石造で
残りは木造です
この計画なら
最低限の手間で
おそらく
中型の馬車が
通れるようになる
こちらの二重線で
示したルートは
別の案です
こっちはかなり
大規模な工事が
必要になります
幅が広く 頑丈な
道を造るプランです
造る橋は三〇
すべて
石造だとして
おそらく
工期は八年
ふたつも
考えたの？
こういうのは
代案がいくら
あってもいいんだよ
資金や工期
いろんな条件と
見合わせて
いくんだわ
どうします？
手直し…
まずは
四か月のもので
お願いします
はやっ!?

ずいぶん
即断即決ですね
ええ
一刻も早く
馬車が通れる道が
欲しいのです
すっ
がしっ
よろしく
お願いします
貴方に会えて
よかった！
こちらこそ

ふたつの世界へ
渡る道を目指して！

もう
食事中くらい
図面を置こうよ

モキュ
モキュ

悪い悪い
だけど
どんどん頭の中に
新しい工法や工夫が
湧き上がってきてさ

本当に
土木馬鹿だなぁ

仕方ないさ
早く造ってくれって
橋が言っている

橋が？

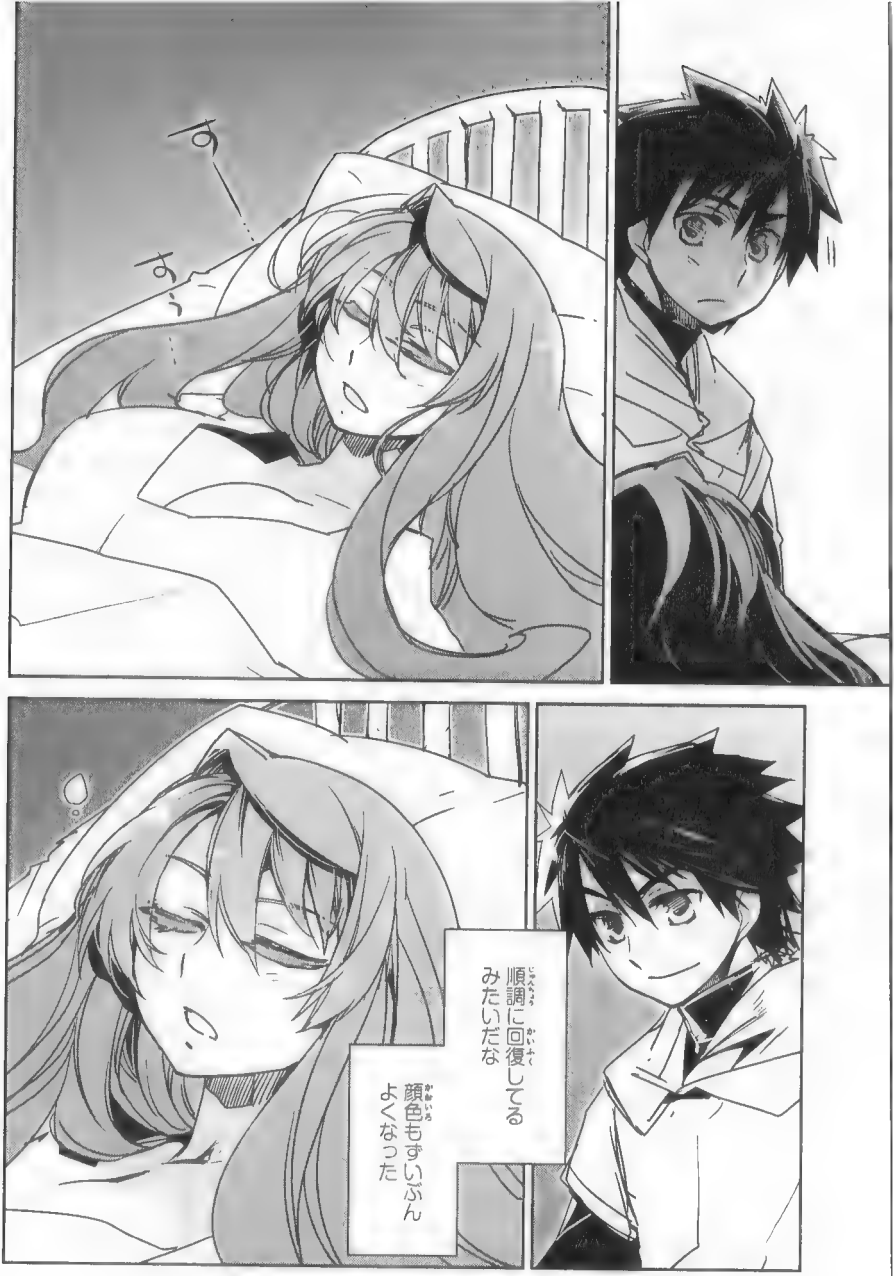
……
あんた ほんとに
変わってるよ

でも
お前も一緒だろ
お前の中からは
いつも歌があふれ
出てくるじゃないか
え？
…うん
生まれ出たい
声なき声が
ハルモニアを
歌い上げる
胸のなかで
フィドルが
リラが
ツィンクが
勇壮な響きで
鳴っている
早く生まれたいと
懇願の声を立てる

「聖骸」って
聞いたことがある？
ん
いいや？
トン
あたしも
詳しくは知らない
ただ
開門都市の噂に
かすかに聞こえるの
その言葉が
あたしを誘うの
あたし
出かけたい
遠くに
行くのか？
もしかして
地上か？
うん…
いつ帰れるかも
わからないんだ
でも 帰って
くるんだろう

俺の橋は
お前を
旅立たせることが
できるんだ
そして
お前の帰りを
迎えることも
俺の橋は
お前の帰りを
ずっと待っている
もちろん
俺もだ
うん
すごいものを
たくさん
見てこい
うん
すごい音も
たくさん
聞いてくるよ
そうして
また この街で
会おう
…約束
だよ

我らは
「紅の子弟」
ああ
あたしたちの
約束は絶対だ
キ
ガチャ…
ヒュー…


す
すう
順調に回復してる
みたいだな
顔色もずいぶん
よくなった

ふにっ…
ふにっ…
う…
ん
ぴくっ
ふにっ…
○
○
おお
来ていたのか
勇者
なんで
そんな
遠くに？
ああ
今きたとこちゃ
ドキ
ドキ

具合はどうだ？
もう痛みはない
そろそろベッドからは出られるかな
おとなしくしてろって
ギャー
ギャー
退屈すぎる
まあまあお土産をやるからさ
どこに入れたっけ
なんだ？
ぷるん
なんだこれは
メイド妹新作のカスタードプディングだ
まぁ食えばわかるよ
!!
ぱく

甘い！
美味い！
ハシュ
ハシュッ
おいちぃ♥
冷たくて
とろぉりとして
初めて
食べる味だ
この　とろりと
したものは
果樹の蜜か？
まったく
新しい
まったく
メイド妹の
料理への情熱には
驚かされる
まったくだ
メイド長も
言っていたぞ
『料理はメイドの
必須技能の
ひとつですが
あの子のご馳走に
かける執念には
ときには 上級魔族を
越えた気迫を
感じる』ってな

メイド姉も
メイド妹も
すごい成長を
したもんだな
ああ
まったくだ
メイド長のほうが
先生に向いて
いたのかもな
そんなこと
ないだろ
あのヒヨッコ
だった二人も
今じゃ立派に
国の仕事をしてるぜ
おお
彼らのことも
報告書を見るたびに
驚かされる
！
いや
そういえば…
魔界でも
育てかけていた
弟子がいたな
何!?
マジかよ
勇者が
やってきたので
放置して
しまっていた

まぁ
彼らも
よい若者だ
のたれ死んでいる
ということは
あるまい
うーむ
けっこう
放任主義だなぁ
スキルは
現場でないと
身につかない
ものなのだ
そいつらも
かわいそうに…
ほれ
なんだ？
ん？
カスタードクリーム
つけっぱなしだ
そうだったのか
…うむ
あれは
おいしい
気に入った
みたいだな

たまになら
怪我も悪くないな
勇者が優しい
あんなことは
もう勘弁してくれよ

俺のを半分で
いいならやるよ
いいのか？
ぜひいただこう
ゴソ…

ん…

ほい

それは勇者の
プディングなのだから
勇者が すくって
分けるべきなのだ！
この完璧な
論理に申し分は
あるか!?
ないな！
あー
はい

あ
ん
ぱくっ
これはまた格別だな
ホラ
またクリームが
その指ですくったのも私の分だ
半分こだと言ったら半分にすべきだぞ
契約を守らないのは信義にもとる
ペロ

どうした勇者？
なんでもない
――メイド長にブディング届けてくる
？
バタン
ドドドドド

蒼魔領
蒼魔宮殿
刻印王様
都の住人の掌握は完了いたしてございます
――奴らは？

我が領の周囲に軍を配置し
こちらの様子をうかがっている模様です
あちらから仕掛けてくる様子は
今のところございません
フン
腰抜けどもが
どういたします？

少し予定は早まるが
例の計画を進めるとしよう
奴らとの連絡はついているのか？
それは滞りなく
…しかし
奴らはなぜあんなものを欲しがるのでしょうな

聖王国南部
開拓村
ざわっ……
おおぉ…
何だあれは!?
ざわっ
ざわっ
あんなに離れた鐘が！

十月
十月
見たか
光の子らよ！
これこそ
精霊の御業
この鉄の杖こそ
光の精霊が
魔を討つために
お与えになった
マスケットなる武器
この鉄の杖
さえ あれば
汝らであっても
歴戦の古強者がごとく
戦場を駆けることが
できるのだ

汝ら光の子が
この地に
集められたのは
来るべき邪悪との
戦いに備えるため
この村には
畑があり
汝らを
養うだけの食糧が
備えられておる

また 汝らへ
悪魔との
戦いを指導する
教え手もある
汝らは
これから半年の間
この新しい村で
生活し
光の精霊の子
としての奉仕を
せねばならぬ

忌まわしき魔界…
地下に蠢く魔族どもは
光の精霊に背く
背教者である

こともあろうに
その背教者たちは
我らが光の子の
宝を盗み
今の今まで
謀り続けて
きたのだ！

それは
光の精霊様の
聖なる遺骸
つまりは
聖骸である！

奴ら
教えに背いた
者どもめらは
光の信徒の希望
復活の象徴
聖骸を貶め
辱めんがために
我らから それを奪い
押し隠してきたのだ！

大主教様は御自ら
おっしゃられた！
このような過ちを
我らは見過ごす
わけにはいかない
たとえ 自らの命を
懸けてであろうと
聖骸を奪還すると！

これは聖なる任務である！
マスケットを持ち立ち上がれ！
おおおおおお
光の信徒の力を今こそ結集させるのだ！

聖王都
八角宮殿
ドォォ。
ドォォ。
報告します！
「光の子の村」の造営は予定どおり
司教様が教化に回られています
――ああ
わかった

…また
試射なさって
おいでですか
暴発の危険も
まだございます
ご自分の立場も
お考えください
考えているよ
上に立つ者が
使う兵器の性能を
知らなくては
はじまるまい？
それにしても
聖骸…だったか？
面白い口実を
考えたものだ
大主教も
なかなかの
やり手ではないか
信徒たちの
操り方を
よくご存じだ

終 第三十二話 我ら紅の子弟

第三十回

道路の発展と影響

人々の往来によって生まれる道。
単に移動しやすいだけでなく、
商業の発達や軍事、国の発展にも
大きく関わっている。

新たな道をつくるには、それに見合った労力と費用が必要。それだけに綿密な計画は欠かせない。

必要から生まれた舗装道路

人間が陸上を移動するうえで、徒歩はもっとも基本的な手段だ。そして、徒歩での移動を容易にするものが「道路」である。

もっとも原初的な道路は、往来によって踏み固められた「踏み分け道」だ。これは「けもの道」と同様に、集落間や、集落から水源など一定の場所を多数の人間が往来することで土が踏み固められ、草木が生えにくくなって自然に誕生した道路である。

しかし、のちに車輪が誕生して荷車や馬車がつくられるようになると、従来の踏み分け道では起伏の激しさや道幅の不足などから、これらの車両が通れないといった事態が生じ、新たに車両が通れる道路がつくられるようになった。

ただ、こうした道は土がむき出しで風雨に弱く、特に雨が降ると柔らかくなって泥になりやすい。荷車が通ると車輪が泥にはまって動けなくなることもあったため、この欠点を解消するために「舗装道路」が誕生する。

当初の舗装道路は石畳によるもので、紀元前1100年ごろの中国では、数万キロにも及ぶ石畳の道路がつくられていた。ヨーロッパでは、共和制ローマ時代につくられたローマ街道がよく知られており、紀元前312年につくられたアッピア街道が最初だという。

こうした大規模な事業には、それなりの人手が必要であり、国家の主導が欠かせない。ローマ街道が整備された理由も、軍隊を迅速に移動させるためという軍事的な目的からだった。しかし、整備された道路が一般にも開放されていたことから、結果として流通が盛んになり、商業の活性化にもつながった。

また、道路網が構築されるにともない、情報の伝達速度も向上した。ローマでは馬による伝令が書簡を運んでおり、街道には専用の「駅」が設けられて、替えの馬や休息所が用意されていた。北イタリアからローマまで、3日程度で情報が伝わったという。紀元前20年代末から始まったアウグストゥスの時代には「郵便制度」もあり、多くの伝令が街道を行きかっていた。

こうした道路網はローマが強国たりえた理由のひとつでもあったが、領土が増えるたびに拡張されて維持費が莫大となり、のちにローマ帝国が瓦解する財政上の理由のひとつにもなった。

人魔族の伝令制度は、多種多様な混血を抱える性質上、諸勢力の情勢をいち早く知る必要があったためだろう。

Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

まおゆう魔王勇者
「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」⑨

漫画 **石田あきら**　原作 **橙乃ままれ**　キャラクター原案 **水玉螢之丞・toi8**

2013年12月26日初版発行

発行者
山下直久

発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　電話／(03)3238-8521（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/
編集　**角川書店**
〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19　電話／(03)3238-8719（編集部）

装幀・デザイン
沼利光（D式Graphics）

印刷 **共同印刷株式会社**　製本 **共同印刷株式会社**

初出／『月刊コンプエース』'13年10月号、12月号、'14年1月号

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）
電話049-259-1100（9:00～17:00/土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041　埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1
この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。
2013 KADOKAWA CORPORATION, Printed in Japan

©Akira ISHIDA 2013
©2011 Touno Mamare
ISBN978-4-04-120938-7 C0979